ナショナリズムを巡る憎悪と侮蔑
:「排外主義」批判と「拝外主義」批判

熊坂 元大（徳島大学）

昨年は流行語トップテンの一つに「ヘイトスピーチ」が選出され、書店ではしばらく前から「特亜」と呼ばれる中国・韓国・北朝鮮の三国を嘲る書物が並んでいる。8 月 5 日には朝日新聞が、従軍慰安婦の強制連行に関する報道の一部を訂正した。日本におけるかつての、「特亜」やナショナリズムを巡る言論状況を知る者のなかには、隔世の感を覚えるものも少なくないだろう。分水嶺がどこにあったかを言うことは難しいが、『戦争論』や『嫌韓流』の出版、日韓 W 杯共催とそれについての報道、民主党政権成立など、この点に関する社会情勢の変化を考えるうえで、いくつかの重要な要素を挙げることはできる。これらの要素が右派、たとえば在特会にどのような影響を及ぼしたかは、いくつかの先行研究でも簡単に言及されている。だが本発表では、右派ではなく左派が、こうした要素にどう対応した/しているか、という視点で事態を眺めてみたい。

というのも、在特会やその活動に共感を寄せる人びとが、「特亜」を中心とする外国や外国人、そして彼らから見て「拝外的」な日本の個人や組織に憎悪の言葉を投げかける事態にスポットライトが当てられている一方で、右派に対する対応のなかにも侮蔑に満ちたものが少なからずあるように思われるからだ。たとえばネット上で嫌韓発言が増加しはじめた頃から、ネットで右翼的発言をするものを「ネトウヨ」と呼ぶようになったが、その際、暗に明にネットでしか威勢の良いことが言えない存在だとする侮蔑的ニュアンスが伴っていた。今や「ネトウヨ」的言説はネットの外へと飛び出し、その影響は冒頭で述べた通りである。最近では「反知性主義」や「幼児性」といった表現も時折用いられるが、ここでも異なる意見を持つものとの対等な対話を試みるというよりは、むしろ上から見下す姿勢が見えるが、これが右派の反感を煽っている可能性もある。『嫌韓流』を描いた山野車輪は、自身が嫌韓拡大のきっかけと見なす W 杯に関して、その背後にあったのは「韓国や在日に対する反発というよりも、まずはメディアに対する反発」だと述べている。近年でも、フジテレビをはじめとするいくつかの企業に対するデモや不買運動が行われているように、「排外主義」の一員とされる人びとは、必ずしも国籍や民族でのみ攻撃対象を選定しているのではない。自分たちの集団的な誇りやアイデンティティを傷つける存在に怒りの声をあげているのである。

彼らの怒りがどこまで妥当な根拠に基づいたものか、彼らの怒りの表し方が許容されるか否かという点は十分に検証する必要があるが、ある種のバックラッシュとしての「排外主義」に対して、これまでの日本の左派の対応は適切ではないどころか、かえって右派を先鋭化させる一因にもなっていたのではないだろうか。本発表ではこの点を検討するとともに、凋落の囁かれる左派が復権するための道筋を探る。